
THE GIRL'S STORY

とも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE GIRL'S STORY

【Nコード】

N02370

【作者名】

とも

【あらすじ】

あなたは、なぜ生きる？

何を思っで生きる？？

人類哲学の

半永久的なこの問い…

1人の少女が、

これらを問い続ける

運命上に立った

悩み、葛藤しつくし
その間6年間

少女がさまよい
辿り着いた先は
果たして光か闇か…

輝きを忘れ
俯き、逃げ、隠れ、
『死にたい』と呟いた
幼きあの日から

笑顔と夢と今とを
手繰り寄せて
『生きたい』と宣言した
6年後まで

ありのままを描いてゆく
少女は今、
私の横で笑いながら
公言する

『私、夢が決まったよ!!
グラフィックデザイナー
なるんだ!』

『あの頃はホント

最悪だったね 笑
だけどトラウマ並の
どん底だったから、
今が在るんだ
って思えるよ』

少女は今、
美術大学進学を希望し
また新たな葛藤に
気が滅入って
ハゲそうなくらい
悩んでいるそうだ

でも、昔とは
違う葛藤のよう…

あなたには、
わかるだろうか？

冒頭の問いの答えが
少女の2つの
葛藤の違いが…

stand up!!!!

2004年、
全ては始まった

田舎町の
ごく平凡な家庭に
生まれた少女は、
小学4年生になっていた

『大人しい』
『無垢』『素直』を
そのまま具現化した様な
子供で、

気は弱いけど、
優しくて友達も多かった

全校100人に満たず
1学年1クラス、
4年生も13人しかない
田舎の領域内の話だが…

この2004年、
ごくごく普通なこの少女
そして少女を取り巻く
ごくごく普通な環境が
一変し始めた

ちょうど、4年生の
秋頃だっただろうか

突然の出来事だった

少女は、

いじめられはじめた

THE GIRLS STORY 2

理由は、
未だにわからない

12人の同級生全員が、
次々手の平を返していく

厳密に言えば2〜3人は
巻き込まれるのを恐れて
同化しただけだった

いじめ と言っても、
直接的ではなく
間接的なものだった

隣の席や同じ班になると
極端に嫌がる…

授業や給食で
机を合わせる際、
極力机を離す…

とにかく無視し、
話しかけると
ツンケンした態度…

少女が触れたものを
忌み嫌い、
”菌”を作り出して
真剣に遷しあう…

誰よりも人に優しく
誰よりも人を想い
誰よりも人を信じた、
少女は…

誰よりも、
人を信じられなくなった

当然、初めは
信じなかった

”私が何か皆に
しちゃったのかな”

そう言い聞かせて、
周囲への態度は
変えなかった

…どんな態度を
とられても…

それでも、

ついに認めざるを
得ない日が来た

THE GIRLS STORY 3

1人で歩いて帰っていた

後ろから

同級生の笑い声が
聞こえてくる

大方、また

悪口言っただらうな…

そんなことを考えながら
帰路を歩んでいた

ガッッ

鈍い音と衝撃が、
身体に響いた

後方の同級生は
笑うどころか
爆笑していた

なんとなく

何が起こったのか
見当はついていなかったが、

反応を見せれば余計
笑われることが
わかっていたので、
そのまま歩いた

自宅につくなり
ランドセルを下ろし、
座り込んだ

…思った通り、
石を投げられたらしい

右足のふくらはぎが
斜めに切れていた

赤くにじみ、
白のスクールソックスが
少し赤くなっていた

…靴下の血痕が、
薄いピンクに滲んだ
ぼろぼろぼろぼろ、
頬と足と床を濡らす

水玉と共に、
ただ悲しい感情達が

溢れ続けていった

THE GIRLS STORY 4

とうとう、

確信してしまった…

とめどなく広がる

足元の水たまりを見つめ

途方にくれていた

…皆、私を

わかってくれないよ…

信じてくれない…

幼い少女は薄々、

今まで身近すぎて

気付かなかった幸せを

感じていた

誰かが、

隣に居てくれる幸せ…

ただ隣で、

笑ってくれる幸せ…

目をそらさず、

私を見てくれる幸せ…

…失ってしまった…

視界がまた、
ゆがんできた

目をこすると、
不意にピンクに滲んだ
スクールソックスが
飛び込んできた

途端、
胸がグツと押し潰された

明日から…どうやって
学校へ行けばいい？
行ってもツライだけの
学校なんて…

そもそも、
どうやって生きていく？

身近で小さな幸せすら
失った私に、
生きていく理由が
どこにある??

…もう嫌だ…何もかも…
少女は立ち上がって
ランドセルを抱え、

部屋へと走り込んだ

THE GIRLS STORY 5

確信してから、

10日がたとうとしていた

少女は

宿題を終わらせていたが
まだ机に向かっていた

「お姉ちゃん？

お風呂入らないの??」

2歳下の妹が、

部屋のドアを

半開きのまま覗いている

「ああ、

先に入っでいいよ」

妹は不思議そうな表情を
浮かべたまま、

「はい」と言っ

ドアを閉めていった

階段を駆け下りる足音を
確認し、

鉛筆を握り直した

…危なかった…

少女が書き込む紙の
左上には、

『遺書』…

いつ死んでもいいように
いつでも死ねるように…

この10日程で、
少女は変わってしまった

以前は常に笑顔を
絶やさなかったが、

今は何に対しても
無表情・無反応になった

何をしても、
皆の態度は同じ

どうせ一緒なら、
何だっていいや
もう疲れた…

『遺書』を幾度も
推敲し直す

生きているのがツライ、
ここに今存在することが
苦痛でならない、

きつと皆

それを望むから…

“ いじめられたから
死ぬ ”

とは書かなかった

皆のせいにしたって、
何一つ満たされない
と思っていた

実はそれは

いじめられながらも

性分に根付く優しさだと

皆が気付いたのは

随分先のことである

THE GIRLS STORY 6

日中の気温も

15 をきる様になり、

そろそろ秋も終わりだ
と言う頃だった

少女は例によつて
1人で帰っていた

踏切で引っかかり、

まだ電車来ないのかな

と何気なく振り返った

200mほど後ろに、

同級生の女子が

2人で帰っていた

少女は振り返るなり、
すぐわかった

…しょうもねー…

敢えて

ほっというて歩いて行った

すると、

自転車のベルの音がした

近所の団地に住む

中学生の知り合いだった

「わっつ

久しぶりやな〜!!」

互いに小学生の頃、

よく遊んでもらったな…

懐かしくて、

久々に笑顔が浮かんだ

「ホントだねえっ

部活帰りなの??」

「テスト テスト!

もー面倒で嫌だよ〜」

何一つ変わってなくて、

昔に戻った様で

本当に嬉しかった

「…あり??」

あれ美迂じゃないの?

紗希と一緒にさ…、」

…感じ取ったらしかった

「ちょいつつ

何しょーんな！！！」

押してた自転車に乗り、
走っていった

2人で帰っている風に
装ってるだけで、
実際はその背後に
何人が隠れていた…

おおかた、
バカ話のネタでも
探しに来たんだろう…

踏切も上がり、
少女は彼女らを置いて
駆け出した

…むなしい…

THE GIRLS STORY 7

少女は、

一度も泣かなかった

泣いたらキリがない

と言うより、

傷ついてたらキリがない

と感情を消していた

自分を守るうと、

無意識下で必死だった

…いや、

”泣けない”が正しかった

感情がないから、

泣くことはおろか

笑うこと怒ること

喜ぶこと…

何もなかった

生きていくのに

必要な生理的感情しか

なくなつた

「空腹」「疲労」「睡眠」

切なかつた

なぜ生きているのか、
わからなかつた

少女は

友ダチなんか要らない
と思う反面、

中学では心友作ろう
と決めていた

闇の中の、
唯一の『未来』という
光だつた

今の現実を見ると
切なすぎて、

未来の希望を夢見て
生きている
と言つても過言ではない

現実を見たつて、
こんな私の力じゃ
何も変わらない

それどころか
悪化するのだから

THE GIRLS STORY 8

その日も

いつもと変わらず、

いつも通り1日は終わった

そしていつも通り、

1人で帰ろうとしていた

帰りの会も終わり、

ランドセルを背負って

机を離れた瞬間だった

「ああ、

ちよっと待ってくれる？」

珍しく担任の先生に

呼び止められた

「…はい」

最近忘れ物が多いだとか

宿題出してないだとか、

特に身に覚えはないので

少し驚いた

皆が、何か先生に

でっち上げた
って辺りが妥当やな…

そう思いながら、
小さい教室に
2人だけになった

窓からは、
6年が陸上記録会に向け
ソフトボール投げだの
ハードルだのリレーだの
走り幅跳びだの高飛びだの
練習風景がよく見える

その脇で細々と、
低学年の男子が
サッカーをしていた

もう11月というだけあって
紅葉の鮮やかな色も
抜け落ち、

景色は茶色で彩られていた
教室の窓が
開いていたせいで、
風が入ると同時に
落ち葉が何枚か
紛れ込んできた

窓を閉め、
小さな落ち葉を
拾い集めていると

「いつも、

丁寧で優しいなあ」

突然褒められて、
面食らった

「あ……」

ありがとうございます……」

この先生、

何がしたいんだ??

検討がつかず、

落ち葉をゴミ箱へ入れた

改めて教室は

静寂と化した

少女は

先生の意図が掴めず、

どうして良いのか

わからなくて

そのまま黙っていた

THE GIRLS STORY 9

先生は小さな小皺を
幾つか浮かべ、
少女に問うた

「今、
学校、楽しい??」

心臓の奥底に、
小さくながらも
鋭利な針が刺さった

ドオン
と、何かに
打ちつけられた気分だった

「はい……」

思わず口ごもった

「本当に??」

「……はい……」

先生が疑っているのは
明らかだった

少女は内心、
”遅いわバカ”と毒づいた

「そうかあ、
じゃあ何かあった時
話せるのは誰??」

「綾華ちゃんと…
美辻ちゃんです」

「仲いいもんね〜
他の女の子は??」

変な汗が滲むのが
よくわかった

段々、
核心に触れてきた…

「未紀ちゃんや、
智香ちゃんも…」

「紗希ちゃんは??」

「話すことは話すけど、
あまり…」

「…ふうん…」

少女は無意識のうちに
震え始めていた

「男子はさ、
女子程でなくても
どうなん??
苦手?」

「…絶対嫌 とは
言わないけど
まあ…苦手です…」

逃げる少女の視線を、
先生はずっと追っていった
逃れるにも、
先生のまっすぐな視線が
怖かった

心臓が、静かに かつ
痛く鼓動を響かせる

THE GIRLS STORY 10

少女は、

先生が次に

どんな質問をしてくるか
気が気でなかった

「最近はず、

誰と帰ってるの??」

「妹がまだいたら

一緒に帰って、

いなかったら1人です…」

「美辻ちゃんや

紗希ちゃんは??

方向同じじゃない」

「大概、

先に帰っちゃってて…」

「あら…

一緒に帰ろうとは

言わないの??」

返答に困ってしまった

混乱する頭を

とにかく落ち着けて、

一語一語並べていこう…

「…えと…」

言う前に帰ってたり、

あたし自身が

忘れていたり…」

しどろもどろしながら

答えた

少女はとにかく、

ナチュラルに答えようと

必死だった

…怪しまれないように…

と、言っても…

言葉を取り繕ってる

なんて、もう明白だった

だからこそ、

余計に焦った

先生はなかなか

口を割らない少女を

見据えながら、

どンドン突いてきた

…今まで、
ツラくとも寂しくとも
自ら隠してきた数々

逆に

自ら告白するツラさを、
少女は初めて知った

THE GIRLS · STORY 11

少女は態度だけでなく、
声まで思うように
ならなくなった

なのに先生は、
質問を止めようとしな

「皆にさ、何か嫌だな
って思うようなこと
言われたり、
されてない?」

「っ……
…大丈夫、です…ッ…」

喉が、
カサカサと乾燥している
感覚がする

そのせいか
言葉が詰まって、
スラスラ出てこない

何より、
頭に言葉が浮かばない

質問される度、
頭が真っ白になって
パニックに陥る

先生は

そんな少女の様子を
ずっと見据える様な目で
見ていたが、

ふうっ とため息をついて

「…何を、

怖がっているの…?」

「…え…??」

少女はまた混乱した

怖がっているって、

私が??

そんな風に、

見えるの???

どうしよう

どう答えれば、

下手に疑われなくて
済むかな???

THE GIRLS STORY 12

「先生にはね、
何かを恐れて
怯えてる様に
見えるの……」

こんな時、何て答えれば
疑われないで済む？

”気のせいだったんだ”
と納得出来る様な…
そんな答えは……

「そう、ですか…？
気のせいだと
…思います…」

返答が思いつかず、
適当に濁した

すると、先生は
思いもしない言葉を
口に始めた

「…本当に……??」

先生の真つ直ぐで
見据える様な目が、
少し厳しい目に変わった

「今、何かを

怖がっているよ

なんで、逃げるの??」

やめて と叫びたかった

怖がっている って

言われても…

何故逃げる って

聞かれても…

わからないよ

そんなの

私、怖がってるの?
逃げてるの??

THE GIRLS STORY 13

「怖がって……ません」

とうとう、溢れてきた

「怖がっているよ」

生徒が目前で

泣き始めても、

先生は目の色を変えずに
坦々と話す

「何かが怖くて、

隠そうとしている

逃げずにさ、

話してごらんよ」

少女は先生の本心が

欠片もわからなかった

ただ、

「何も…わかりません」
と涙ながらに

何とか言うのが
精一杯だった

でも、本当に何も
わからなかった

先生は私が
何かを恐れている
と言っけれど、
全然思い当たらない

当然だった

少女には、
感情がなかったから

マトモな感情を
持っていたら、
傷つく なんて
生易しい状態でいられない

少女は無意識のうちに
自分を守っていた

先生が
それに気付くまで、
しばらくの時間を要した

先生は
本当の少女の状況を

察すると、
黙ってしまった

今まで問うてきたのは、
少女にとって
苦痛に他ならなかった…

THE GIRLS STORY 14

今度は2人揃って
悩み始めた

少女は嗚咽に紛れながら
闇雲に悩んでいたが、
先生は深く悩み始めた

今まで
自分が聞いてきたのは、
ただ少女を
混乱させるだけだった

この子はもつと、
人として根源的な次元で
苦しんでいる様だ…

いや、
“生き物として”が
正しいかもしれない

私自身、
生命単位に戻って
考えてみよう……

先生は教員生活上初めて

…いや、人生上初めて
『生きる』ことを考えた

「……………ねえ」

沈黙を先に破ったのは
先生だった

その先の台詞は考えず、
ただ呼び掛けた

「…何ですか……………??」

泣きじゃくる少女は
嗚咽をこらえ、
何とか返事をした

先生は、ただ
その瞬間の少女を見た

その一瞬の少女の姿

それだけを見るために
声をかけた

THE GIRLS · STORY 15

少女は、
泣きすぎてウサギの様に
赤くなつた目で
落ちていた視線を
先生に向けた

「……………??」

呼びかけるだけで、
先生は
何をする訳でもなく
黙つて少女を見てくる

何故だか
先生が怖くなつてきて、
少女は一度乾いた頬を
また濡らし始めた

…先生は、確かに見た
返事をして
顔を上げる瞬間の少女を

ただ泣きじゃくる処に
声をかけると、

一瞬確かにビクツと
肩を震わせ、怯えた

そして熱い水を拭い
顔を上げた瞬間…

口をキツと結び、
宇宙まで見据える様な
真っ直ぐな目をしていた

何も言わず

見つめるだけの先生を
前にしてまた混乱し、
泣き始めてしまったが…

…本当に子供なのか
と疑う様な強い目だった

決して目つきが
きつかった訳ではない

凜とした強さと
実直な素直さを
持ち合わせた目だった

大人でもこんな
素敵な目をした人、
少ないだろうな
と先生は本心から思った

先生は確信した

この子は、素敵な人間だ

生徒だとか教師だとか

関係なく、

この子がスキだ

護りたい…

「ねえ…、

今、ツライこと、
言っただらん」

先生は、少女を

本当の意味で

楽にしてあげたかった

それでも少女は未だ

“自分の気持ち”が
理解出来ず、

必死で隠し通そうとした

「なんも…ない、

ッです…」

先生は、

少女が隠し通そう

としているのを

察していた

それでなお、問い続けた

「ホントに何も無いの？

最近、なんだか

「元気なさそうだよ??」

少女は少女で、
適当に流し続けた

「あ…多分、…、
最近お母さんと
喧嘩してるから…
…っ…そのことも」

先生は、
口からの出任せだと
ちゃんとわかっている

「じゃあ、お母さんに
話してあげるよ!
元気になって
ほしいからね、
話して……」

「いいですっ!!!」

思わず大きな声を
出してしまった

動揺しているのが
丸わかりで、
先生は落ち着いて言った

「なんで??」

何が、あるの…?」

「……っと……」

「ッ私……が、
頑張らなきゃ、
いけないこと……だから

……努力する他は、
私自身が……
自滅、するだけです……

まだまだ……頑張りたいし……
正念場、だから、
今だけは……1人で、
頑張らせて下さい……っ」

先生は、

何も言えなかった

小四がこんな語句を

平然と使うことに

驚いた訳ではない

頻繁に図書室に通い、

読解力に富む子だから

先生にとっては

何等不思議ではなかった

そんなことではなく、

彼女の思考力だ

大人の私でも、

そんなこと中々考えない

少女は

こんな立派な返答を

こなすほど、

数多の感情の淵を渡り

歩いてきたのだろうか？

それほどまでに、

苛めは酷かったのか？？

そんな感情の際を、
彼女は一体どれだけ
歩いてきたのか？
立ち往生は、
しなかったのか…？？

つい先日、10歳を迎えた
小学生にしては
ませてる…
…いや、違う

先生の中で、
“ませた子”より、
“可哀相な子”が
勝るようになった

先生はつい、

「そう……」と

素っ気ない返事を
してしまった

私が

想像してた範囲なんて、

この子は軽く

飛び越えている

10歳とは思えない程の

ツライ境遇を

細々と生きている

なのに、私から

彼女に言えることって…

先生の方が

途方に暮れてしまった

その時だった

少女が何を悟ったのか、

感じたのか、

さっぱりわからないが

「先生…
何か、っ…頼み事なら、
やりますよ?…」

先生は沈んでいた視線を
引き上げられた

少女が未だに
心を開いていないのは
言うまでもないが、

「…ありがとう…
特に何も無いから大丈夫
…先生も、頼み事あれば
なんだってするからね」

先生はまた
別のことに驚いていた

「はい…」

この子…
根っから優しすぎる

心を許していない私を、
気遣って…

10月だったか、
孤立し始めても

変わらずに親切だった

皆、

心苦しかったのかな…？

先生は、

ようやく辿り着いた

「…ねえ…、

最近楽しかったことって
何？？」

少女は、

少し涙がひいた赤い目を
丸くして、

呆気にとられた様子…

…というよりも、

ぽかん としている

その目の前で先生は、

“この子は

人を幸せにしたい

と強く願える強い子…

だけど

自分が幸せになる術を

知らない…！！！！”

その術を、

教えなければいけない
教育云々ではなく、
幸せになつてほしいから
好きだから…

そう信じ、

少女の返事を待った

THE GIRLS STORY 19

少女は少しずつ、
導かれ始めた

…楽しかった、こと……

そんなものなかったし、
気にもかけてなかった……

…思い当たらないや……

「…うん……と、

…こないだ、お父さんと
バレー観戦に行ったこと
……です」

随分前のことだが、
嘘ではない

でも、言い終わった途端
なんだか切なくなった

「バレーって、
今やってる国体の？」

「お父さんに突然

連れていかれたから
どこの試合か
わかんなかったけど…、
…国体よりは…
規模小さかったです」

これも嘘ではない

確か北阿知なんちゃらと
庭瀬木とかいう、
聞いたことがない地名が
チーム名だった

「じゃあアマチュアの
大会かなあ」

「だと思えます
…北阿知…だとか
庭瀬木とかいう
チームあったから、
この辺のじゃない
と思うんですが…」

「庭瀬木は
県南の端の方にあるよ

でも、北阿知は
聞かないなあ……」

「お父さんに聞いても

わからん って
言われちゃって」

先生が思わず吹きだした

「お父さん、

何にもわからないのに
試合連れてったの?!」

「うちのお父さん、
結構アウトですww」

少女は切ない反面、
久々に楽しい気分になっ
ていることに
気付いた

少女は軽く笑いながら、
さっきの先生の問いが
忘れられないでいた

… - 楽しかったこと - …

さっきの

バレエ観戦の話は、

確かに事実だ

「そっかあ、バレエ

楽しかったんだね！」

でも

「はい！」

楽しくなんか、なかった

「先生は明後日の

鞍子アリーナの

東京対愛知の試合

行きたいんだよねえ」

私の外は笑ってる

「ただ、中の私は笑ってないよ…」

「あ、千葉って結局1回戦で愛知に負けたんですか?？」

「…私の…」

「負けちゃった負けちゃった! ストレートであつと言う間に負けちゃった」

「…楽しかった…こと…」

「勢いの割にはアツサリ終わったもんですね」

「嬉しかった…ことも…」

「あれはさすがに見てていたたまれないねえ」

「…幸せだと、感じたこと…」

「帰るとき、選手も」

地元も気まずいですよね」

少しでも…

そんなことが…

「そうだねえ、でも
結果が全てじゃない
からね!!」

先生が、不揃いの
八重歯を出して笑った

…先生は、

…先生は、

…先生は、

楽しそうですね…

気付くと、嫌みではなく
本心で思っていた

私には…私は…

何一つ、なかったよ…

THE GIRLS STORY 21

私には、

何があるんだろう

薄い笑顔を作りながら

少女は気付いた

避けられてる事実と…、

…他には…

「試合ボロ負けしても、

どんなチームよりも

努力して頑張ってる方が

エライが？

結果なんてあくまでも

数値化出来るモンだけ

だからねえ」

先生は、少女が

悩み込んでいるのが

わかっていた

「数値化出来るモノ

って、テストとか

稼ぎとかですか??」

だから、ある事に
気付かせたくて
話を続けた

「そうそう!!
楽しんで稼いじやう人と、
苦勞しても稼げない人が
居るようにね」

少女は、
なかなか気付かない

「え…と、
働くことの本分は
稼ぐことじゃない
と??」

自分には何もない
ということに
薄々気付いているだけだ

先生は少女の心情が
ようやくわかってきた

それに伴う切なさと、
単に会話の返答として、

「そう言えたら

理想だねえ」

さすがに先生は
言えないわｗｗ」

カラカラ笑った

でも、その笑顔で
少女がより深刻に
悩み込むことには
気付かなかった

… - エガオ、… 笑顔 - …

THE GIRLS STORY 21

私には、

何があるんだろう

薄い笑顔を作りながら

少女は気付いた

避けられてる事実と…、

…他には…

「試合ボロ負けしても、

どんなチームよりも

努力して頑張ってる方が

エライが？

結果なんてあくまでも

数値化出来るモンだけ

だからねえ」

先生は、少女が

悩み込んでいるのが

わかっていた

「数値化出来るモノ

って、テストとか

稼ぎとかですか??」

だから、ある事に
気付かせたくて
話を続けた

「そうそう!!
楽しんで稼いじやう人と、
苦勞しても稼げない人が
居るようにね」

少女は、
なかなか気付かない

「え…と、
働くことの本分は
稼ぐことじゃない
と??」

自分には何もない
ということに
薄々気付いているだけだ

先生は少女の心情が
ようやくわかってきた

それに伴う切なさど、
単に会話の返答として、

「そう言えたら

理想だねえ」

さすがに先生は
言えないわｗｗ」

カラカラ笑った

でも、その笑顔で
少女がより深刻に
悩み込むことには
気付かなかった

… - エガオ、… 笑顔 - …

「働く理由って…、
稼ぐのと目標達成
ってところですかね??」

「そーだねえ、
あと社会貢献とか!」

「ですね…
子供のうちは、
親と社会に
育てられてますもんね…」

成人して就職して、
恩返し…かなあ」

「やっぱ
よく本読むだけあつて、
ホント語るねえ」

「あつっ…すいません」

「謝ることはないよー!
ただ凄いねって」

先生はそう言って、

微笑んだ

瞬時、

少女が反応したことは
露知らず…

「暇人な、だけです」

少女は苦笑いを浮かべた

内心、

笑顔になってみたかった

それで

先生を安心させたら、
この場を切り抜け
られるかもしれない

何より…

…ただ笑ってみたかった

そんな心中とは裏腹に、
上手く笑えなかった

THE GIRLS STORY 21

私には、

何があるんだろう

薄い笑顔を作りながら

少女は気付いた

避けられてる事実と…、

…他には…

「試合ボロ負けしても、

どんなチームよりも

努力して頑張ってる方が

エライが？

結果なんてあくまでも

数値化出来るモンだけ

だからねえ」

先生は、少女が

悩み込んでいるのが

わかっていた

「数値化出来るモノ

って、テストとか

稼ぎとかですか??」

だから、ある事に
気付かせたくて
話を続けた

「そうそう!!
楽しんで稼いじゃう人と、
苦労しても稼げない人が
居るようにね」

少女は、
なかなか気付かない

「え…と、
働くことの本分は
稼ぐことじゃない
と??」

自分には何もない
ということに
薄々気付いているだけだ

先生は少女の心情が
ようやくわかってきた

それに伴う切なさと、
単に会話の返答として、

「そう言えたら

理想だねえ」

さすがに先生は
言えないわｗｗ」

カラカラ笑った

でも、その笑顔で
少女がより深刻に
悩み込むことには
気付かなかった

… - エガオ、… 笑顔 - …

「働く理由って…、
稼ぐのと目標達成
ってところですかね??」

「そーだねえ、
あと社会貢献とか!」

「ですね…
子供のうちは、
親と社会に
育てられてますもんね…」

成人して就職して、
恩返し…かなあ」

「やっぱ
よく本読むだけあつて、
ホント語るねえ」

「あっつ…すいません」

「謝ることはないよー!
ただ凄いねって」

先生はそう言って、

微笑んだ

瞬時、

少女が反応したことは
露知らず…

「暇人な、だけです」

少女は苦笑いを浮かべた

内心、

笑顔になってみたかった

それで

先生を安心させたら、
この場を切り抜け
られるかもしれない

何より…

…ただ笑ってみたかった

そんな心中とは裏腹に、
上手く笑えなかった

THE GIRLS STORY 23

少女の頭の奥底が、
白くぼやけたのが
わかった

それは、確実に色濃く、
広がっていつて、
頭を真っ白にした

ワタシ、笑ウコトガ
デキナインダ…

ワタシニハ
…ナニモ無イ…
ナニモ…デキナイ…

途方に暮れる少女を察し、
先生はまた問うてみた

「…今、
考えてることを
言ってくらん」

「え、…と……」

唐突に問われ、
完全にテンパった

想いがまとまらない

ただ、

”ドウシヨウ”

”チャントコタエラレナイ”

”ワカンナイ”

と焦るだけだ

私が、考えてたこと？

つい先刻のことなのに、
ただモヤモヤした気分しか
覚えていない

少女は

ひたすら悶々と悩んでた
と客観的にしか感じれず、
主観的な考え方

…いや、

主観的な生き方を
知らずに生きている

感情のカケラもなく
むしろ客観的にしか
生きていけなかった

少女が主観性を失ったのは
自分を護るため

でも、自分ですら
見失ってることに
気付いてなかった

あの時私、
何を思っていた？？

そして今、
何を思っている？？

「……何も……
わかんない……、です……」

気付けば、また塩水が
ぼたぼたと頬を濡らしてた

THE GIRLS STORY 24

また、泣き始めた

目の前に

海が出来るんじゃないか
というくらい

止め処なく溢れてくる

わああ泣いた

先生は質問を止めて、

ただ少女の背中をさする

少女は、わんわん泣く

闇雲に泣いているけど

あてもなく泣いているけど

さっきの涙とは、

明らかに何かが違う

それは少女も先生も、
具体的にはわかっていない

少女は

自分自身の今の感情が
わからない
とハッキリ自覚している

先生は

この子はまだ己の感情を
把握していない
と確かに感じている

だけど少女は、
それでも今はただ泣きたい
と

だけど先生は、
好きなだけ泣かせてやろう
と

お互いに、どこか
やんわりした心持ちだった

お互いに、
”ともかくにも
泣きたい時に泣かなければ
それが”生きる”こと
…きつと…”

根拠はこんなにも
漠然としているのに、
2人とも穏やかな
同じ気持ちでいた

「先、生えっ……」

少女は嗚咽と言葉を、
喉に引っかからせながらも
ようやく吐き出した

「何??」

優しく

でも重みがある返事が
返ってきた

「…っ絶対……」

皆お…責めない……で、

…下さ…い……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0237o/>

THE GIRL'S STORY

2011年10月8日00時49分発行